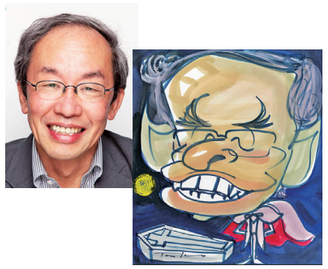
顔学会ウラのカオ
～学会運営に携わる委員会のご紹介～

会員担当

日本顔学会の理事で会員担当をしているのが、原島博・村上泉子・菅沼薫の３名です。会員担当とは会員の管理を務めるものですが、入退会や会費請求などの事務的なことは、㈱毎日学術フォーラムにある日本顔学会の事務局に依頼しており、会員担当理事の実質的な役割は名簿と会員動向の管理、会員サービスとなります。現在（４月末）の日本顔学会の会員数は523名です。日本顔学会は多彩な分野の多くの方に参加いただいており、会員の方々からの会費で運営されています。

顔学会の特徴は、学際的な集団であることです。顔学会のホームページ表紙にあるように「時代は顔学だ！等身大の学術を目指し、まずは集団的ダ・ヴィンチ科学へ」というように、それぞれ専門の研究者と顔に興味がある人ならだれでもが参加できるところに面白さがあります。そして、顔学会は会員がただ参加するだけでなく、積極的に活動に協力してくれる方々が集まっています。日本顔学会が発足して28年になりますが、コロナ禍も明け再びリアルな顔の時代になります。顔学の活動が未来に向けてさらに続けられるように、会員担当として会員サービスの向上を念頭に、会員増も含めて学会の発展に寄与したいと思っています。

今年2023年度からは、学会誌やニューズレターの印刷発送を止めて電子化します。そのかわり、会員へは年間活動を示した冊子を12月に発行する予定です。多くの会員が、活発に意見交換でき、交流し、新しい発見のある場を提供するために、会員担当も取り組んでいきます。顔学の未来のためにみんなと一緒に！　（菅沼 薫）


原島　博（小河原智子さんが描いた似顔絵）

村上 泉子（高橋エツコさんが描いた似顔絵）

菅沼　薫（輿水先生が描いた似顔絵）

フォーラム顔学2023『人々のための顔 ～ 顔の技術と社会受容性』のご案内

日本顔学会は、顔に関連した分野の従来の枠組みを超えたネットワークの創造と、研究発表の場として登壇・デモ発表を中心とした学術大会を開催しております。顔に関する研究に加え、インタラクションや感性に関する研究など、顔学に寄与する・寄与しうる研究を広く募集します。

- 日　程：2023年10月14日(土)、15日(日)
- 会　場：つくばカピオ（TX つくば駅より徒歩10分）
  （〒305-0032 茨城県つくば市竹園１丁目10-1
  対面とオンラインのハイブリッド形式を予定）
- 発表申込締切：6月30日　　・抄録原稿締切：7月14日
- プログラム公開：8月10日　　・参加申込締切：9月30日

情報は随時更新します。詳しくはウェブサイトをご参照下さい。　https://www2.jface.jp/forum2023/index.html

編集委員会だより

今回（第81号）より、ニューズレターは電子版のみのお届けとなりました。さまざまなデバイスからご覧いただけますので、日本顔学会の会員の方にもそうでない方にも、より気軽に楽しんでいただけると嬉しいです。

ニューズレターでは読者のみなさまのお声をお待ちしております。ニューズレターへのご意見、ご感想はもちろん、Now the Faceの取材協力者(自薦・他薦)も募集しております。

ニューズレターのページ（右のQRコードまたは下記URL）に掲載されているご意見記入フォームよりお寄せください。みなさまと一緒により親しみやすく楽しい紙面づくりを目指してまいります。

https://www.jface.jp/jp/newsletter

（ニューズレター編集長　光廣 可奈子）

編集委員

光廣 可奈子

新木 美代

髙野 ルリ子

中洲 俊信

富澤 洋子

牛山 園子

福浦 友香

米澤 泉(協力)

松永 伸子(協力)

山南 春奈(協力)

メンバー募集中！

発行：日本顔学会 ©　編集・製作：日本顔学会 J-FACE 編集委員会　日本顔学会事務局
〒100-0003　東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 9F　株式会社毎日学術フォーラム内　TEL：03-6267-4550　FAX：03-6267-4555
発行日：2023 年 6 月 9 日　＊無断転載を禁じます。

J-FACE NEWS LETTER
日本顔学会ニューズレター 81 号
9 JUNE 2023 Vol.81　https://www.jface.jp

Contents

P1. Now the Face ／図書紹介
P2. 顔学オンラインサロン報告／美人画研究会/クリエイティブタイプの会報告
P3. 日本顔学会若手交流会報告／化粧文化研究者ネットワーク研究会報告
P4. 顔学会ウラのカオ／フォーラム顔学2023のご案内／編集委員会だより

2023年3月14日　第44回顔学オンラインサロンでの「いい顔」!?

now the face

いい顔とは何か？

コロナ禍で私たちの「顔」はデジタル化されたリモート顔となり、屋外でもマスク顔が普通になってきたが、ちょうどマスク着用が解禁となった３月13日の翌日に開催された第44回顔学オンラインサロンでは、『「いい顔」とは何か？一緒に考えよう』という話題提議がなされ、改めて「いい顔」を考える機会があった。そこでは、原島博先生（元日本顔学会会長、東京大学名誉教授）、菅沼薫氏（日本顔学会会長）、阿部恒之先生（日本顔学会副会長、東北大学教授）、馬場悠男先生（国立科学博物館名誉研究員）の工学、心理学、哲学、人類学、動物学などの多様な分野の一人者である４名それぞれの視点から提案があり、参加者間で「いい顔」についての討論が交わされた。

「いい顔」とは多種多様である。馬場先生は、顔は生きるために存在し、周囲との係わりの中で多様な表情が生まれるもので、「いい顔」は一つではないという。何を基準に判断するのかは、その人の経験や影響されてきたもの、またその時の状況や社会背景など、さまざまな要因が相まって、「いい顔」と判断されるのではないか。

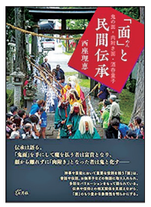
例えば、菅沼氏は、美容科学的な視点からの顔分析やメイクアップ方法を基準に観ると、顔の特徴は平均顔を基準として、個人がなりたい印象に沿うよう、“ズレ”を造っていき特徴を出し、メイクアップで顔の印象は変えられる。つまり「いい顔」を施すことが出来るのではないかという。さらに、楽しんでいるとき、好きなことをしているとき、幸せな気分の時など、さまざまなシチュエーションでの笑顔もまた最高のメイクアップであり「いい顔」であるという。

また、阿部先生は、心理学・哲学の視点から、顔は、レーダー（受信装置）であり、且つスクリーン（発信装置）でもあるため、その人の印象や魅力がスクリーンに投影され、それを他人が受信する。「牽引力のある顔」つまり「心を引き寄せる顔」が、魅力的な「いい顔」ではないかという。

「いい顔」についての議論は尽きない。自身も、年々その判断基準は変わってきている。今後も、さまざまな分野の方々の多様な視点からの「いい顔」について議論を交わししつつ、多くの「いい顔」に接することで、その場に相応しい「いい顔」が自然とできる人でありたいと思う。

（企画担当理事　村上 泉子）

図書紹介



「面」と民間伝承
鬼の面・肉付き面・酒呑童子
西座　理恵 著

ISBN-10：4909544240
ISBN-13：978-4909544247
発　売：2022年2月
定　価：6,800円（本体）
発行所：七月社

皮膚をみる人たちのための化粧品知識
日本香粧品学会編

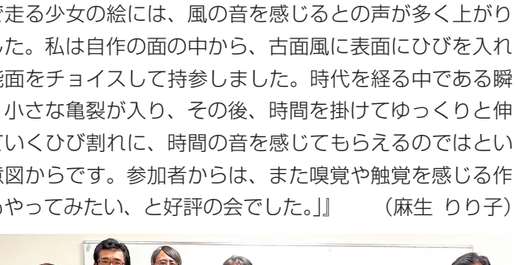
ISBN-10：4525341610
ISBN-13：978-4525341619
発　売：2022年6月
定　価：3,000円（本体）
発行所：南山堂

顔学オンラインサロン報告（第41回～第45回）

顔学オンラインサロンは、夕食後に気軽に顔そして顔学について語り合う場として、月１回のペースで、Zoomにて開催しています。毎回、会員・非会員問わず多くの方々に参加いただいております。

○第41回　2022年12月6日（火）
話　題：地域の顔　サイトスペシフィックな芸術の表現方法
話題提供者：柴田　悠基 氏（香川大学創造工学部講師 現代アート）

○第42回　2023年1月17日（火）
話　題：見た目と個性 ―リベラリズムから見たルッキズム
話題提供者：原　塑 氏（東北大学大学院文学研究科　准教授）



Zoom席描き似顔絵、新春似顔絵バトル（第43回）で描かれた似顔絵たち

○第43回　2023年2月7日（火）
話　題：Zoom席描き似顔絵、新春似顔絵バトル
話題提供者：斎藤　忍 氏（尚美学園大学講師）
似顔絵制作：宇田川 のり子 氏、阪西 明子 氏、高橋 エツコ 氏、
中野 英明 氏、吉村 まゆみ 氏、松永 伸子 氏

○第44回　2023年3月14日（火）
話　題：いい顔とは何か？　一緒に考えよう
話題提供者：原島　博 氏（東京大学名誉教授）
討論者：菅沼　薫 氏（日本顔学会会長）、
阿部　恒之 氏（東北大学教授）、
馬場　悠男 氏（国立科学博物館名誉研究員）

○第45回　2023年4月11日（火）
話　題：なぜ歯がなくなると老人性顔貌になるのか
話題提供者：中島　功 氏（昭和大学歯学部口腔解剖学講座客員教授）

美人画研究会／クリエイティブタイプの会報告（第29回）

■2022年11月6日(日)　13：30～16：30
＜会場：森下文化センター創作室＞

ご参加いただいた新木美代さん、麻生りり子さんに感想を伺いました。

『「音を感じる作品」というテーマで、視覚から聴覚を刺激する作品を持ち寄り、意見交換しました。多かったのはそのものズバリ、絵の中の人物が楽器を奏でている作品。どんな曲だろう、どんな音色だろう、というのは、演奏者の表情や描かれた背景などからイメージが喚起されました。興味深かったのは、実際には聞こえないであろう音や、音にならない音を感じる作品も多かったことです。水色のドレスの女性が掲げ持つ壺から流れ落ちる水。その水音と同時に静寂も感じました。遅刻だろうか、両手に荷物を持って切羽詰まった表情で走る少女の絵には、風の音を感じるとの声が多く上がりました。私は自作の面の中から、古面風に表面にひびを入れた能面をチョイスして持参しました。時代を経る中である瞬間、小さな亀裂が入り、その後、時間を掛けてゆっくりと伸びていくひび割れに、時間の音を感じてもらえるのではという意図からです。参加者からは、また嗅覚や触覚を感じる作品もやってみたい、と好評の会でした。』』　（麻生　りり子）

『「音を感じる美人画」。私はタイトルを見ても何のことか見当がつかなかった。当日、会員さん達は持参した絵から聞こえる音について発表をされた。壺から流れ落ちる水量や水しぶきの無さから感じる静寂さ。俯き加減の顔から覗く大きな目に見る不穏な音。髪の毛の揺らぎの大きさは曲の優雅さを想像させ、丸っこいものはアップテンポな音を感じた。走りながら空を見上げた口の開き加減で感じる息遣い、装飾の一部として描かれている渦巻きした線から音の雄大さを捉える。仮面の静止した表情に浮かぶヒビから聞こえてくる時間の流れという音。ミステリーさながら描かれた時代に流行っていた曲を割り出し演奏している曲を推測する等、会は平面な絵から想像力をフル活用して絵を見るとは全くの予想外であった。なんだか遠い昔に絵や音等で五感の世界を楽しんだ感覚が蘇る時間ともなった。次回テーマは味覚を感じる絵である。はて、絵からどんな味がするのか楽しみだ！』』（新木 美代）

◆詳細は美人画研究会ホームページ
https://bijingakenkyukai.jimdofree.com/

日本顔学会若手交流会報告（第27回）

若手交流会第27回の定期交流会は、2022年５月15日にオンラインにて開催されました。今回は、立命館大学の大橋佳奈さんと東洋大学の安藤圭佑（筆者）、二人の若手研究者が講師となり自身の研究について講演しました。二人に共通しているのは、古くから議論がなされている「表情フィードバック仮説」について研究されているという点になります。

まず、大橋さんは「モニターを通して悲しみ・喜び表情を観察した場合の感情状態の変化」と題して、コンピュータディスプレイ上において自分自身の顔を操作した顔を見ることによる感情状態の変化についてお話頂きました。先行研究での実験手法をそのまま使用するとディスプレイ上の顔を自分で切り替える必要があり、自分で表情を変化させているという操作感（Sense-of-Agency）が感情に影響を与えてしまうと考えたそうです。そこで、表情変形システムを利用してこれを分離する実験を行いました。結果、自身で表情を切り替えた際には悲しみの感情が強く表出するという結果が明らかになったそうです。

続いて、安藤は「笑顔の表情フィードバックに影響を及ぼす要因の検討～表情形成の強度・形状・自然さに着目して～」と題してお話させて頂きました。この研究は強度・形状・自然さの３種類の要素を意識して、意図的に笑顔を形成した際の生理・心理面の変化を計測し、それぞれの要因が表情フィードバックに及ぼす影響を調査した研究になります。結果、心理面において変化が起こることがわかりました。まず、自然さを意識して形成した笑顔は最もポジティブな印象を喚起し、強度を強めた笑顔では明るい気持ちになる一方で、違和感も生じてしまうことが明らかになりました。

講演後の交流会でも講演の内容についての深掘りと熱い議論が交わされ、あっという間に終了時間となりました。

若手交流会では研究発表や講演をベースとして、顔に関わる様々な分野の知見を広げるとともに、参加者同士の親睦を深められる場を提供しております。これまでの定期交流会の開催報告は若手交流会のHP【**https://sites.google.com/view/jface-wakate**】にて公開しておりますので、ぜひ一度御覧下さい。　（安藤 圭佑）

化粧文化研究者ネットワーク研究会報告（第60回～62回）

■第62回研究会
「歴史の中のジェンダーとセクシュアリティ」
日時：2023年３月11日（土）
講演者：三橋順子氏（性社会・文化史研究者）

ようやくCovid-19に収束のきざしが見えはじめた時期に開催された第62回の研究会は、資生堂本社の会議室にて開催したもののハイブリッド形式をとった。

研究会では、12年前に東日本大震災が発生した「14時46分」に１分間の黙とうをはさみ、三橋氏よりお話をうかがった。今回は2022年7月に刊行された『歴史の中の多様な「性」―日本とアジア 変幻するセクシュアリティ』（岩波書店）に基づく内容で、セクシュアリティが社会的につくりあげられた「構築主義」の視点から、日本とアジアを中心に多様な性のあり方を紹介された。三橋氏の説では、現代日本で「当たり前」とされている性意識は、日清・日露戦争までに欧米の性規範の影響を受けて徐々に変化をしてきたとする。前近代では衣服をまとった状態の外見、「なり」を重視する社会で、若衆と娘の性的欲望は双方向的なものであった。大人の男性の欲望も両者に向けられ、妻は「色」の対象ではなかったという解説を皮切りに、著書を補足するエピソードと写真を多数紹介されていった。三橋氏は執筆の動機を、「日本のLGBT運動は、1969年にアメリカで起きたストーンウォールの反乱からではなく、日本の歴史的背景に基づくものにしないと本当に社会を変える力にはならない」との問題意識があったと語られていた。

当日の会場ではおよそ２年ぶりに北山晴一代表以下、世話人と参加者が集まり、終了後も三橋氏を囲んで、化粧文化を中心とした話題に花を咲かせたなごやかな時間となった。

（山本 芳美）

これまでの研究会のレポートは、ホームページにも掲載しています。　**http://keshobunka.com/**

22年後半は以下の研究会を開催しました。ぜひ、こちらもご覧ください。

■第61回研究会
「陰影化粧としてのアイシャドウ使用―誰のための化粧なのか」
2022年10月22日（土）
講演者：増渕美穂（立教大学院修士／独立研究者）

■第60回研究会
『身体を彫る、世界を印す―イレズミ・タトゥーの人類学』を読む読書会
2022年７月２日（土）
①「人類学からイレズミ・タトゥーを考える」
講演者：山本芳美（都留文科大学教授、文化人類学）
②「現代日本で施術される消えるタトゥー（ジャグアタトゥー）」
講演者：松嶋冴衣（東北大学文学部大学院修士２年、文化人類学）